

“no more ~ than …” 構文についての一考察

西 村 豊

A Study on “no more ~ than …” Construction

Nishimura Yutaka

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

“no more ~ than …” 構文についての一考察

A Study on “no more ~ than …” Construction

西 村 豊
Yutaka Nishimura

はじめに

オバマ前アメリカ大統領が2013年1月21日に2期目の大統領就任演説を行った際の表現の中に、下記の表現があった。

- (1) But we have always understood that when times change, so must we; that fidelity to our founding principles requires new responses to new challenges; that preserving our individual freedoms ultimately requires collective action. For the American people can no more meet the demands of today’s world by acting alone than American soldiers could have met the forces of fascism or communism with muskets and militias. – Text of Obama’s Inaugural Address (読売新聞 2013.1.23)

この日本語訳について読売新聞では

- (2) 「だが我々は常に、時代が変わればわれわれもそうしなければいけないことを理解してきた。建国の精神に忠実であるには、新たな試練に新たな対応を取る必要がある。個人の自由を守るには、結束して行動することが最後には必要となる。かつての米兵は、小銃を携え、民兵とともにファシズムや共産主義に立ち向かうことが出来た。だが、米国民はもはや単独に行動しては、今日の世界の要求に応えることは出来ない。」 – オバマ米大統領就任演説 (読売新聞 2013.1.23)

となっていた。

しかし、日本経済新聞の日本語訳は

- (3) 「しかし、時代の変化とともに我々も変わらなければならないということも常に理解してきた。建国の精神への忠誠は、新たな挑戦への新たな対応を求めている。個人の自由を守るためには、最終的に集団行動が必要となる。米国民が今日の世界の要求に単独の力で応えられないのは、米兵がマスカット銃 (旧式歩兵銃) や民兵組織でファシズムや共産主義の勢力と戦えなかったことと同じだ。」 – 「我々の旅は終わらない」オバマ大統領就任演説 (日本経済新聞ホームページ)

ージ 2013.1.25)

となっていた。

(2)と(3)の下線部の訳は全く正反対の意味であり、どちらかが“no more (...) than”構文を正確に日本語訳していないということになる。

実は、この構文は大学入試の長文読解の下線部訳であるとか文法問題の穴埋め問題に頻出の問題であるとともに、英文を理解するうえで非常に重要な構文である。日本人の多くはこの構文を学校での英語の授業や学習参考書を通じて徹底的に教え込まれていると言える。本稿では、“no more (...) than”構文についての基本的な理解と共に日本の英語教育における指導のあり方について一考察を行う。

“no more ~ than …”構文の基本概念

クジラの公式についての学習参考書の記述

(4) A whale is no more a fish than a horse is (a fish).

(クジラが魚でないのは馬が魚でないのと同様である。)

この構文は俗に「クジラの公式」と呼ばれ、全てと言っていいぐらいの高校生用の学習参考書に記載されており、日本の英語教師でこの構文を高校生に教えない教師はいないと言っても過言ではないと思われる。

では実際にどのようにこの構文を教えているのかを学習参考書をもとに考える。

小寺 (2015:266) では、

A is no more B than C is D

「AがBでないのはCがDでないのと同様である」

→「A=Bの程度がC=Dの程度をこえることはまったくない(A=Bの程度とC=Dの程度に差はないが直訳で、A(クジラ)≠B(魚)を言うために、明らかにC≠Dである例(ここでは馬≠魚)を引き合いに出す表現である。結果的には「AがBでないのはCがDでないのと同様である」という意味になり、A=B、C=Dの両方を否定することになる。上の例のようにB=Dである場合、普通Dは省略される。¹⁾

高橋・根岸 (2003:214-215) では、

A is no more B than C is D

「AはBではない、それはCがDでないのと同じだ」、「CがDでないのと同様AはBでな

い) のように両方とも否定する意味になる。

注意 1. この **no more** は **than**〜に比べて「少しも程度が高くない」の意味である。すなわち、「クジラが魚である」ことが、「馬が魚である」ことに比べて「少しも程度が高くない」ということを表現している。「馬が魚である」という事実はゼロだから、「クジラが魚である」という事実も（同程度に）ゼロである、ということになる。このようにこの構文は、明らかに事実でない (C is D) という例を引き合いに出して、(A is not B) であることを強調して述べる構文である。解釈するうえでは、直感的に (A is not B) を読みとることが大切である。

注意 2. B=D のときは D は省略される。²⁾

小寺と高橋・根岸のクジラの公式に対する説明はほぼ同じであると考えられる。他の英語参考書も大体同様である。

つまり、学習参考書では基本的に “no more (...) than” 構文は「主節で表されている否定の程度と than 節で表されている否定の程度が同じ」であると述べているのである。

江藤 (2015:168) も、英語を学ぶ大学生や一般の英語学習者を対象とした英語学習書において、「no more を『否定的に同じ』と理解すると、『クジラの公式』という奇妙な文も簡単に理解することができます」³⁾ と述べ、小寺や高橋・根岸と同様の説明を行っている。

クジラの公式の意味の多面性

クジラの公式について Quirk et al. (1985: 1136) は次のように述べている。

When *more* is a determinative or a head of a noun phrase, ... the unit *no more (...) than* is synonymous with *only as many (...) as* in countable contexts or with *only as much (...) as* in noncountable contexts:

(7) Paul has no more friends than I have. ['... only as many as ...']

(8) I have no more money than you have. ['... only as much as ...']

...

But when *more* is an adverb, ... *no more (...) than* has special implications.

Consider:

(9) Rachel is no more courageous than Saul (is).

The sentence implies that Rachel and Saul are not courageous.

...

No more ... than has the same meaning when *more* modifies a gradable noun:

(10) She is no more a fool than you (are).

...

The rhetorical effect of the construction is not so much to make a comparison as to intensify the negation. That effect is most obvious when the comparison is absurd.

(11) He's no more your friend than I'm your mother.⁴⁾

※例文の番号はこの論文の全体の通し番号であり、西村が付加したものである。

(more が限定詞や名詞句の頭にくる場合、no more (...) than は、可算の文脈では「同じ数しか」、不可算の文脈では「同じ量しか」と同じ意味になる。

(7) ポールは私と同じくらいの数しか友だちがない。

(8) 私はあなたと同じくらいのお金しか持っていない。

...

しかし、more が副詞の場合、“no more (...) than”は特別な意味を持つ。

次の文を考えて見なさい。

(9) レイチェルはソールと同じように勇気がない。

(9)の文はレイチェルもソールも勇気がないということを意味している。

...

“no more (...) than”は more が程度名詞を修飾する時には(9)と同じ否定の意味になる。

(10) 彼女はあなたと同じように愚か者ではない。

...

この“no more ... than”構文の修辭的な効果は比較をするというよりも否定を強調することにある。その効果は比較が理屈に合わない陳述の場合に最も顕著になる。

(11) 私があなたの母親でないのと同じように、彼はあなたの友達ではない。)

このように Quirk et al. (1985: 1136)は、“no more (...) than”構文を大きく分ければ、以下の二つに分類しているのである。

(12) 数[量]は少ないが数[量]が同じ。

(13) than 節と同様に. . . でない。

それに対して柏野(2012: 231)では

X is no more (...) than Y の構文は意味論上、主節と than 節の程度が同じであることを表しているのであるが、語用論の観点からすると、主節も than 節もともに否定に解釈される場合と肯定に解釈される場合が存在する。⁵⁾

と述べて、“no more (...) than”構文が否定の解釈だけではなく、文脈によっては肯定の意味に解釈することができるとしている。その場合通例、「確かにXは・・・であるが、その程度はせいぜいYくらい」というような意味になるとして、次のような例文をあげている。⁵⁾

(14) For many people over 50, dry eyes are just another sign of aging, no more a nuisance than gray hair or crow's feet.

(The New York Times Sept. 13,

2005)

([大意] ドライアイはわずらわしいが、せいぜい白髪かカラスの足跡程度だ。)

(15) Backers of such laws point to the more than 80,000 skateboarding injuries reported to the Consumer Product Safety Commission last year as proof that the activity can be hazardous. But skateboarding proponents say their sports is no more dangerous than bicycling.

(The New York Times July 30, 13, 1989)

([大意] スケートボードは危険だとしてもたかだか自転車くらいだ。[such law とは歩道などでスケートボードを禁止する法律]

ただ、柏野(2012)は「意味論的には、主節と than 節の程度が同じであることを表しているということ踏まえ、語用論的に文脈をしっかり理解したうえで、否定的に訳すのか肯定的に訳すのか決定される」と述べながらも、肯定的に訳す場合には上記の(14)、(15)の例文のようにネガティブな形容詞、程度形容詞が用いられるのが一般的であるとしている。⁵⁾

しかし、この考え方で訳し方は(7)、(8)の例文にも適用できると考える。

(7) Paul has no more friends than I have.

(確かにポールに友達はあるが、その数はせいぜい私と同じくらいだ。それほど多くはない)

(8) I have no more money than you have.

(確かに私はお金を持っているが、その程度はせいぜいあなたと同じくらいだ。それほど多くはない)

つまり、柏野(2012)の主張する肯定文に解釈出来る(14)や(15)の例文は、基本的には Quirk et al. (1985: 1136)が主張する「(12) 数[量]は少ないが数[量]が同じ」の「数[量]」が「程度形容詞」に、「少ない」が「ネガティブな意味合い」に代わっているだけであり、「ネガティブな形容詞の程度が同じ」と考えることで解決するように思える。例文(14)は「ドライアイ、白髪、カラスの足跡の3つともわずらわしさの程度は同じで、それほど高くはない」と、例文(15)は「スケートボードと自転車の危険性の程度は同じで、それほど高くない」と解釈することができる。

よって、“no more (...) than”構文の解釈は、Quirk et al. (1985: 1136)が主張する(12),(13)のうちの(12)について次のように再定義したい。

(12) 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない。

入試英語問題におけるクジラの公式

下記の2つの入試英語の長文問題を考えてみよう。

(16) According to the rules of reason, a given conclusion is to be deemed true if, and only if, it flows from a logical sequence of thoughts founded on sound initial premises. Considering mathematics to be the model of good thinking, philosophers began to search for an approximation of its objective certainties in ethical life too. Thanks to reason, our status could --- philosophers proposed --- be settled according to a intellectual conscience, rather than being abandoned to the whims and emotions of the market square.

And if rational examination revealed that we had been unfairly treated by the community, philosophers recommended that we be no more bothered by the judgement than we would be if we had been approached by a confused person bent on proving that two and two amounted to five. (読売新聞 京都大学英語入試問題 2006.2.26)

(理性の原則によれば、特定の結論は、その結論が理にかなった初めの前提に基づいた一連の論理的思考から発している場合に、そしてその場合にのみ、正しいとみなされるべきなのだ。哲学者たちは、数学を優れた思考の雛形だとみなして、生活の倫理面においてもまた、数学の客観的な確かさに近いものを探し始めたのだ。理性のおかげで私たちの社会的地位は、市場が開かれる広場での気まぐれや感情のままにというよりはむしろ知的な判断に従って決定されうると哲学者たちは述べている。

もし、合理的に検証することで、私たちが社会から不当な扱いを受けてきたことがはっきりした場合には、2足す2は5であることを証明しようと躍起になっている頭の混乱した人物が近寄ってきた場合に、私たちがそれに煩わされることがないのと同じように、私たちは社会の下した、そうした判断に煩わされるべきではないのだ、と哲学者たちは提言したのだ。)

(17) The child first must go through a period of blood-and-thunder adventure, where superhuman might and right always win at the last minute, before he can graduate to more sophisticated reading.

There is no more reason to think it will ruin his taste than there is to fear that letting him creep on hands and knees in infancy will keep him from walking in the more elegant upright position. (Chart Institute.(1998). *Improve Your English in Reading* (p.22) .)

(子どもはより上級の読書に入る前に、まず最初に暴力や流血ぎたの冒険、そこではスーパーマンの力や正義が常に最後には勝つ、そんな冒険の時期を経験しなくてはならない。幼少期に子どもをはいはいさせておくことが、立派にまっすぐに立って歩けなくさせるのではないかと心

配する理由がないのと同じように、それ〔冒険話の時期〕が彼の鑑賞力を台なしにしてしまうと考える理由もないのである。)

上記(16)と(17)の例文は、「(12) 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない」のような数[量]を表す語や程度形容詞が用いられておらず、「(13) than 節と同様に. . . でない」の考え方によって日本語訳をすることができる。

しかし、ここで問題なのは、no more (...) than構文が短文の中で用いられている場合には、単にクジラの公式として当てはめるだけで比較的簡単に解釈することが可能であるが、これらの例文(16)や(17)のような長文の中に組み込まれたりすると“no more”と“than”間に多くの語が入ったり、“than 節”が長くなったりして、受験生には“no more (...) than”構文としてなかなか認識できないのが現実である。逆に言えば、このように複雑な長文を出題することによって、受験生の英語力を把握したいという出題者側の意図を強く感じることができる。

オバマ前アメリカ大統領の大統領就任演説の日本語訳を考える

ここまで、“no more (...) than”構文の意味の多面性について考え、Quirk et al. (1985: 1136)が示した二つの分類(12)と(13)のうち、(12)については新たな要素を加えた(12')として再定義した。

ここで改めてオバマ前アメリカ大統領の大統領就任演説の日本語訳をその二つの分類に基づいて考えると、(12')の数的・量的なことやネガティブな程度形容詞を扱っているわけではないので、「(13) than 節と同様に. . . でない」に従って日本語訳をすることになる。すると必然的に(3)の日本経済新聞の日本語訳が適切ということになる。

ただ、読売新聞ほどの日本で一番の発行部数を誇るクオリティペーパーがなぜこのような単純なミスを犯したのかが気になる。読売新聞の日本語訳は、“no more”を単独で「もはや～ない」という意味で訳し、“than”以下の節を肯定で訳している。“no more (...) than”構文として認識できていなかったとしか言いようがない。前述したように“no more”と“than”が離れすぎていて訳者が受験生と同じように“no more (...) than”構文として認識できなかったのであろうか。逆に言えば、それほどに“no more (...) than”構文は難度が高いと言える。

“no more (...) than”構文の大学生・高校生への指導

繰り返しになるが、この“no more (...) than”構文は、英語の苦手な大学生・高校生には理解するのが最も困難な構文の一つであると言える。大西・McVay.(2011:309) もこの構文を「ULTRA ADVANCED」⁶⁾と述べている。その意味で、この構文について、多くの学習参考書が、「(12) 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない」という意味には触れず、「(13) than 節と同様に. . . でない」の意味のみを記述し、単純化しているのは妥当な判断であると考えられる。

江藤 (2015:168) も“no more (...) than”構文の意味について「(13) than 節と同様に. . . でない」の意味のみを説明し、これこそがこの構文を理解・習得するための必要最小限のエッセンスである

と述べている。³⁾

あくまで私の個人的な高校教師時代の経験に基づくものであるが、大学入試問題の英語長文問題における“no more (...) than”構文の日本語訳において「(12') 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない」と日本語訳をしなければならない問題に遭遇したことは皆無であると言える。これは前述したように、出題者側に“no more (...) than”構文の英語長文を「(13) than 節と同様に. . . でない」と日本語訳できる力があるのかを見ること自体が目的となっているからであると考えられる。さらに言えば、出題者側には“no more (...) than”構文を「(12') 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない」と日本語訳をさせる意図は全くないと言っても過言ではないと考える。また、私自身一英語学習者としては恥かしい話であるが、「(12') 数[量]は少ないが数[量]が同じ。程度形容詞のネガティブさは同じだが、それほど高くない」と日本語訳をしなければならない英文に出会った記憶もない。実際に、下記の引用文献・参考文献の中で、(12')の意味に触れているのは Quirk et al. (1985)、柏野(2012)と小西(編)(1989)しかなかった。

従って、この“no more (...) than”構文は、大学生・高校生に対して、すべての意味を教えることは逆に無用の混乱を招くだけである。「主節で表されている否定の程度と than 節で表されている否定の程度が同じ」、もっと簡単に言えば、「否定が同じ」と単純化して機械的に教える方が大学生・高校生の理解を助けることになると同時により実践的であると考えられる。

引用文献

- 1) 小寺茂明 (監). (2013). *デュアルスコープ総合英語* (p.266). 数研出版.
- 2) 高橋 潔・根岸雅史. (2003). *基礎からの新総合英語* (pp.214-215). 数研出版.
- 3) 江藤浩之. (2015). *英文法のエッセンス*(p.168). 大修館書店.
- 4) Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language* (p.155, p831, p.1030). Longman.
- 5) 柏野健次. (2012). *英語語法詳解* (pp.228-235). 三省堂.
- 6) 大西泰斗・Paul Chris McVay. (2011). *一億人の英文法* (p.307). 東進ブックス.

参考文献

- 安藤貞雄. (2005). *現代英文法講義*. 開拓社.
- COBUILD. (2017). *Collins COBUILD English Grammar*. Collins.
- 小西友七 (編). (1989). *英語基本形容詞・副詞辞典*. 研究社.
- 小西友七. (1976). *英語シノニムの語法*. 研究社.
- Leech, G. & J. Svartvik. (2002). *A Communicative Grammar of English*. Longman.
- Swan, M. (2016). *Practical English Usage*. Oxford University Press.
- Thomson, A. J. & A. V. Martinet. (1986). *A Practical English Grammar*. Oxford University Press.

八木孝夫. (1986). *新英文法選書7 程度表現と比較構造*. 大修館書店.

